

# 社会福祉実践におけるソーシャル・インクルージョン・アートの構築に向けた研究(その二)

権 沢 浩

## 1. はじめに

戦後日本の社会福祉の発展は、経済成長、人口増加など、経済社会や人口構造の目まぐるしい変化に直面しながらも、各時代における人々の努力により、特に社会保障制度は国民各層の様々なニーズに応え人々の「安心」や生活の「安定」を支えるセーフティネットとして、その充実が図られてきたと言える。しかし、これまでの社会保障制度は人々の暮らしを物理的な経済面で支えるという側面が強く、精神面の重要性が制度的、社会的に共有され始めたのは1990年以降であろう。一人ひとりが自分らしい生き方を重視した自立生活をどう支援していくのか、今精神面での福祉のあり方が大きく問われている。

本研究の目的は、マイノリティの人々が社会から排除されることなく、一人ひとりの生き方に即した自立生活を営むためには、社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン<sup>(1)</sup>）のなかで幸福（Wellbeing）をどう具現化していくのか、その切り口をアール・ブリュット<sup>(2)</sup>を通じた文化芸術という視点から問い直してみることである。

本研究は、一人ひとりの生き方を担保とした自立生活支援のあり方を Wellbeing やソーシャル・インクルージョンから紐解き、社会福祉における芸術の持つ新たな位置づけを試みることによって、そこから生成される成果物が Wellbeing やソーシャル・インクルージョンの具現化に還元されていくプロセスを検証したものである。

なお、このたびの研究にあたり、先進地である滋賀県の4つの施設の視察、社会福祉法人のぞみの家福祉会が行った「アール・ブリュット at SHIBATA」での、「アール・ブリュットでまちづくり」シンポジウムの開催、新潟県内福祉施設におけるアール・ブリュットに関する実践と実態調査（アンケート調査）を行った。

## 2. 障害福祉分野における芸術文化活動

近年、障害者がつくり出す作品を評価し、発信していく上での一定の共通言語として「アール・ブリュット」という言葉が使われている。障害者の芸術活動において障害の特性が能力として活かされている場合、それをアール・ブリュットという概念の下に評価する枠組みができており、それがきっかけとなって障害者の社会参加が推進されている。また、アール・ブリュットという言葉は、国際的にも認知されており、芸術の枠組みを広げたり、深めたりする作用も期待されている。

一方で、アール・ブリュットという呼称を用いることなく、市民が主体となって自分たちの文化、芸術活動を生んでいく一つの市民活動としての「エイブル・アート」という市民芸術運動や、知的障害がある方の作品について、「アウトサイダー・アート」等の名称でカテゴライズせず、現代を生きる人が生み出す現代アートとして発信しているものもある。

以上のことを踏まえ、アール・ブリュットをはじめ様々な概念・呼称で取り組まれている活動はそれぞれに尊重されるべきであり、障害者の芸術活動としての意義を有する活動については、どのような概念・呼称の下で行われているかを問わずその取り組みを、障害者の芸術活動として国を上げて推進する動きが起きている。

日本の障害福祉分野ではここ 10 年、法律や制度が目まぐるしく変化してきたが、障害者と芸術文化についても様々な変化が起きている。特にアール・ブリュットに関する活動が国内外を問わず活発に動いている。既存の文化や美術教育などに影響されず、独自の手法によって生み出されたアール・ブリュット作品は、日本では障害福祉関係者によって作品が見出され、その魅力を発信する動きが先行したことから、知的障害や精神障害のある作者が多く紹介されている。そのため、障害者の芸術文化振興とも重ねて施策が推進されていることも多い。日本のアール・ブリュットは障害福祉領域の単語と化していると揶揄されることもあるが、作品が人々の心を揺さぶり、関心を引き起こしていることで、障害者の芸術作品＝アール・ブリュットというイメージが浸透している。

このような動きの中で、障害者の優れた芸術作品を評価・発掘し、国内外に発信する活動が「アール・ブリュット」という名のもとで全国的に広がっている。これらの活動は障害者の社会参加の促進、共生社会の実現、芸術文化の発展に寄与するといった観点からみても大きな意義を有しており、もとより作者である障害者の方々の生きがいづくりに繋がっていくことが活動の最も大きな意義であることは勿論、本研究のテーマである「ソーシャル・インクルージョン・アート」の構築へと広がっていくと考える。

また、平成 26 年、国の事業として始まった「障害者の芸術活動支援モデル事業」や、2020 年東京オリンピック・パラリンピックを機にスポーツの祭典とともに、文化の祭典として全国津々浦々で魅力ある文化プログラムを展開し、国内外の人々を日本文化で魅了する「文化力プロジェクト事業（仮称）」は、それぞれの事業が緊密な連携を図り障害者の芸術活動の振興を推進していく事業として障害福祉分野では大いに注目している。

新潟県内における障害者の芸術文化活動については、長年、社会福祉法人、NPO 法人やボランティア組織により行われてきた。そのような中、障害のある人の芸術作品を評価し、活躍する場を提供するサポートセンターが、国の「障害者の芸術活動支援モデル事業」の採択を受けた上越市の「社会福祉法人みんなでいきる」が中心となって平成 28 年 7 月

県内に発足した。

発足したのは「新潟県アール・ブリュット・サポートセンター」通称：NASC（ナスク）である。作品の発掘や企画展の開催、著作権の保護など、障害者の芸術活動を支援する本センターは今後、作品の調査など価値を判断できる人材の育成や企画展の支援などを行い、将来的には常設の美術館を作ることを目標にしている。

このように、障害のある人の芸術文化活動とその支援の輪は、国内外で様々な形で広がっており、今後益々、アール・ブリュットを中心とした取組みが各地に広がっていくものと思われる。

### **3. 先進地での取組み ～ 滋賀県内での4つの施設の視察調査から**

平成28年9月27日～28日の両日、国内でのアール・ブリュット先進地である滋賀県内の4つの施設を視察した。

滋賀県では、近江学園の創立（昭和21年）以来陶芸を中心とした造形活動に熱心に取り組んできた歴史があり、関係する写真集等も数多く出版されている。当時からこれらの作品の中にも今の「アール・ブリュット」と呼ばれる作品が数多く含まれていたと思う。しかし、国内では一定の評価を受けながらも芸術的価値と言う視点からは、一つひとつ作品の評価というよりは障害者によるすばらしい作品という印象が強く、それは芸術の枠外として整理されてきた歴史があった。

平成18年1月、滋賀県にある社会福祉法人グロー理事長北岡賢剛氏が障害者の陶芸作品を持ってスイスのローザンヌにある美術館（アール・ブリュット・コレクション）を訪れたことがきっかけで、日本の障害者の作品が海外で高い評価を受けることになり、その後、スイスとフランスで開催された「アール・ブリュット・ジャポネ展」は地元メディアの反響も大きく、それは「障害者による作品」という論調ではなく、そのほとんどが作品そのものの批評であった。

この海外での展覧会を機に、滋賀県では大きな動きが始まった。平成23年4月に「美の滋賀発信推進室」が設置され、アール・ブリュットを「滋賀の美」の一つとして位置づけ国内外にその魅力を発信していくプロジェクトが進められることとなり、また県庁内の他の部署では私たちが視察した、NO-MAの展覧会等の事業の他、アール・ブリュット作品が多く輩出される福祉施設での造形活動を支える取組みや仕組みの検討が進んでいった。

以下、視察した滋賀県内にある4つの施設を紹介する。

#### 《近江学園》 ～児童福祉施設



戦後の混乱期、法律や制度がまだ整わないときから戦災孤児や障害のある子どものために力を尽くした人物として、後に「障害福祉の父」と呼ばれ「この子らを世の光」と語りかけた糸賀一雄氏が創立した「近江学園」(昭和21年創立)では、学園の創立の翌年から「窯業」を取り入れ、粘土を利用した生産活動を始めた。この造形活動が子どもたちの人格形成に大きな役割を果たすとして、その後、県内の他の福祉施設にも障害のある人の自由な造形活動が広がった。

現在は、中学を卒業すると窯業科や木工科などに所属し就職に向けて技術を磨いており、窯業科では粘土を使って茶碗や造形作品を作っている。

#### 《信楽青年寮》 ～施設入所支援・生活介護事業所



施設では、創立当初(昭和30年)から、働くことを通じて自立させることを優先に、地場産業である窯業による職業指導を主とした生産教育に取り組んできた。その中で陶芸作品を中心に障害者アートの先駆的な取り組みにも力を入れ、作品は国内外と様々な展覧会に積極的に出店している。

#### 《やまなみ工房》 ～生活介護・就労継続支援B型事業所



創作活動を中心とした利用者支援は、一人ひとりが持つ才能や可能性を引き出し、かつ創作活動に集中できる環境を整えている。この環境で作られる作品の数々はその魅力とともに新しい価値を創造している。また、国内外での作品展覧会を通じて観る人によっては芸術性やファッション性に富む作品として、パリ・コレクションにおける服飾デザインに採用される作品が出るなど、福祉施設で作られる作品とは想像し難い高い価値を生み出している。

## 《ボーダレス・ミュージアムNO-MA》



を超えていくという実践を試みている。

近江八幡市の重要伝統的建造群保存地区にあり、昭和初期の町屋を改築したミュージアム。ここの特徴は、障害のある人の表現活動の紹介を核に、一般アーティストの作品と共に並列して見せることで「人の持つ普遍的な表現の力」を感じてもらおうところにある。つまり、「障害者と健常者」をはじめ、様々なボーダー（境界）

## 4. 新潟県内の福祉現場におけるアール・ブリュットの実践



平成 28 年 10 月 1 日～5 日にかけて、アール・ブリュット at SHIBATA が開催された。

この催しは、私が勤務する社会福祉法人のぞみの家福祉会が主催して行ったもので、障害者の方々の作品を通じて人が表現することのすごみ、豊かさを伝えるための取組みとして平成 26 年から毎年開催している。

一般の美術展覧会とは異なり、会場は街中のお寺で、知的障害のある方々の作品を中心とした展覧会で特に作品の種類や内容にはこだわらず、ありのままの作品の中から、観る方の心に残るようなものを展示している。

また、10月1日の初日には展覧会と並行して「アール・ブリュットでまちづくり」というテーマでシンポジウムを行った。このシンポジウムは、アール・ブリュットの魅力を通じて衰退する街中を活性化できないかを、他の分野で市街地活性化に取り組む方々をシンポジストに迎えて開催した。私たちのアール・ブリュット展をきっかけに、将来的には「新発田で一般の美術館とは違うおもしろそうなものを展示しているところがある。新発田へ行ってみよう」と思わせるような、大きくは「まち中まるごと美術館でまちを活性化」、もっと言えば、「アール・ブリュットで“まちづくり”」が大きな目標である。

この他にも、新潟、長岡、上越の各地でも、NASCの協力サポートのもと、アール・ブリュットのイベントが盛んに行われるようになってきた。

このことは、作品の作者である障害のある方々にも注目が集まるきっかけとなり、作品そのものの芸術性は障害者という一部のマイノリティの人々の作品というより、一人ひとりの作者が持つ独特の感性と独特の表現が、これまでの美術作品と違って観る者を引き付け



て止まないのである。

障害があるから限られたことしか出来ないというイメージを、障害の有無にかかわらず人間が持つ能力や可能性をあらためて考えさせられるきっかけが、このアール・ブリュットの実践から湧き上がっているのである。

そこで、より広く新潟県内の現状を把握したく「新潟県内の障害者福祉施設におけるアール・ブリュットに関するアンケート調査」を実施した。

具体的には、障害福祉現場における芸術活動の現状と課題を把握することを目的に、新潟県全域から通所系の障害福祉サービス事業所 116 ケ所、入所系の障害者支援施設 42 ケ所の計 160 ケ所を対象にアンケート調査を実施し、結果 84 ケ所の事業所から回答を得た（回収率 52.5%）

アンケートの結果からは、新潟県内の福祉施設でのアール・ブリュットに対する関心の高さが窺われた。障害のある人たちの表現の一つとしての作品があらためてその価値や評価を受ける中で、事業所としても障害者の芸術活動にどのように取組むべきかを模索しているが、実際の活動までには至っていない事業所が多いようである。しかし、活動に向けた気運は確実に広がっていることがアンケートを通じて確認できた。

事業所としては、自由な作品づくりを障害者のニーズとして捉え、作品づくりを通じて障害者自身の隠れた才能や可能性を引き出そうとしている。ただし、活動を行っていく上での課題も多く、費用面での画材や道具の調達、制作にかかわってくれる人材（支援者）や専門機関・アドバイザーの確保など、まずはこれらの課題をクリアーしていく中で、福祉施設における芸術活動が推進されていくものと考ええる。

## 5. ソーシャル・インクルージョンの具現化に向けて

2012年のロンドンオリンピック・パラリンピックでは、スポーツだけでなくソーシャル・インクルージョンの実現に取組む文化芸術プログラムがイギリス全土で展開され大きな成果を上げた。

我が国でも、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを我が国の文化芸術の価値を世界に発信するまたとない機会と捉え、文化芸術立国の実現に向け文化プログラムの推進を図ることとされているが、この中で、障害者の優れた芸術活動の普及の促進が求められている。

このことは、これまでの障害者芸術活動の取組みの中で、その作品の数々が国内外で高

い評価を得て来たことにより、特にアール・ブリュットという芸術の枠組みを中心として日本における新たな文化芸術として位置づけられたものとして、国内では今後益々障害者の芸術活動が盛んに行われていくことは間違いないところである。

近年、高齢者や子ども障害者等、社会的に弱い立場の人々を含め誰もが地域社会の一員として参画していくことのできる社会づくりが求められている。しかしながら、少子高齢化・人口減少といった国が抱える大きな社会問題とともに、身近な地域では個人世帯や核家族、共働き世帯の増加などを背景に地域社会での住民同士のつながりが弱まって来ている。

かつての私たちの地域は、人と人とのつながりの中で、お互いを認め合い、そして時には支え合うことで孤立せずにその人らしい生活を送ることが出来ていたのではないだろうか。それぞれの地域では、今のように明確に高齢者、子ども、障害者だからといった分類はせず、世代や背景の異なる人々がそれぞれの役割や個性の中でつながり支え合っていたように思う。

これからの時代は人々の高齢化により、より多くの人たちの生活の中心が職場から地域に移っていく。人々の生活の基盤としての地域の重要性が一層高まる中、地域において、住民がつながり支え合うことがこれまで以上に必要になってくる。そのためには国が進める「地域共生社会」の実現に向けた改革、取り組みを進めて行く中で、ここに誰もが地域の一員として参画でき支え合っていくというソーシャル・インクルージョンの考えを取り入れた地域づくりが必要となってくる。

多様な人たちが混在する地域社会において共生社会の実現に向けての第一歩は、まずは身近で暮らす人への関心から始まるのではないだろうか。障害者の芸術活動は、これまであまり関心のなかった人々の意識を変えるものとしてこれまで以上に注目されていくと思う。

人々の関心は「ハンディのある障害者がなぜこのような作品を描けるのか」といったことから、その人の性格や個性、日常生活がどうなっているのかへの関心へ移る。そこにこれまで持っていた障害者に対するイメージとは違った現実を知ることによって人々の意識が変わっていくのであり、そういった人々の意識の変化がもたらす先にソーシャル・インクルージョンの具現化と Well-being、共生社会への実現へとつながっていくことになるのではないだろうか。

## 6. おわりに

アール・ブリュットがブームとなった背景には、障害のある人の個性的でインパクトのある作品がこれまでの美術作品とは違った、「よく分からないが、なんだか凄い」といっ

た印象を持つ不思議な魅力に満ちた作品が多いからである。単純に「アール・ブリュット＝障害者の作品」ではないが、これからも福祉の現場を中心に自由で何ものにも縛られない作品をつくるといった活動が益々広がって行くのは間違いないところである。

「ソーシャル・インクルージョン・アートの構築に向けて」、この実践の先に障害のある人のエンパワメントや、もっと言えば「生きがい」や「幸福」に繋がっていくのが私たちの期待するところであり、また、これらの活動を推進して行くのが私たち福祉現場の役割だと思う。

最後に、滋賀県にある社会福祉法人グロー理事長北岡賢剛氏の「想いを綴る心の旅」というコラムの一説を紹介して本報告を終えたい。

障害のある人の中には素晴らしい才能を持った人がいて、それは健常者とか障害者といったものではなく人としてその人が持った才能の一つであり、障害を克服して発揮されたものでもなく、彼らが元々持っている力、彼らそのまま発揮されるものだということを私たち福祉関係者は社会に投げかけることが必要だと思う。

多くの市民の意識は、「障害のある人は生きる上で税金で支えなければならない人たち」なのである。そういう意識を変えることのできるのは障害のある人たちに寄り添う現場の私たちであると思う。福祉サービスの充実と障害のある人のエンパワメント、そのことに取組んでこそ私たちの役割は果たせる。アール・ブリュットの活動はその一つであり、もちろん他にも障害のある人のエンパワメントする要素は沢山ある。気が付いた者が、そしてやらなければならないと思った者が、やることから始めるしかない。

福祉の仕事には夢があると確信的に思う。誰もが暮らしを分け合いながら共に生きる。そういう社会を実現するためにはどういう価値が必要か、日々の取組みと深い思考の連続が豊かな地域社会を醸成していくのだと思う。つまり、新しい価値を創造することなのである。



## 註

- (1) ソーシャル・インクルージョン  
ソーシャル・インクルージョン（英：social inclusion）とは、社会的に弱い立場にある人々をも含め市民ひとりひとり、排除や摩擦、孤独や孤立から援護し、社会（地域社会）の一員として取り込み、支え合う考え方のこと。日本語は「社会的包摂」。
- (2) アール・ブリュット  
アール・ブリュットはフランスのジャン・デュビュッフエという芸術家が考案した言葉で、日本語では「生（なま）の芸術、生（き）の美術」と解釈されている。美術の専門的な教育を受けていない人が、伝統や流行などに左右されずに自身の内側から湧きあがる衝動のまま表現した芸術のこと。

### (参考文献)

- 文化庁（2013）「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」厚生労働省
- 日々是好日（2017）「新潟県アール・ブリュット・サポートセンター報告書」社会福祉法人みんなでいきる
- 吉本光宏レポート（2014）「オリンピックと文化プログラムについて」公益財団法人企業メセナ協議会
- 文化庁（2017）「文化プログラムの実施について」文化庁長官官房政策課
- 北岡賢剛（2012）「想いを綴る心の旅」社会福祉法人グロー

## 《あとがき》

“アール・ブリュット”に関する定義は勿論、作者が表現する意図も分からない。精神科医の北山修氏の次の文書は、その答ではないが、障害のある方々の声にならない声の診察カルテのように思える。

私たちにはその表現の本当の意図を理解することはできない。だからこそ決めつけず、自由な表現をそっと見守りつつ寄り添うだけで彼らは安心し、作品をつくり続けられるのだろうと思う。

社会福祉法人のぞみの家福祉会 樺沢 浩

著書：「コブのない駱駝」から

著者：精神科医 北山修

～アール・ブリュットとは～

一般的には、障がい者などを中心に、伝統的な芸術の訓練を受けたわけでもなく、他人から評価されて名声を得ることを望んでいるわけでもなく、自の心に従って自然に表現したアートのこととされています。社会のインサイダーの芸術ではないという意味で「アウトサイダー・アート」とも言われます。

しかし、定義がはっきりしているわけでも、ある特定の表現スタイルでもくくられているわけでもありません。いわば「名づけられないアート」「ネームレス・アート」と呼ぶのがふさわしいのかもしれませんが。

作品はどれも個性的でインパクトがあり、何かを主張していますが、固定された意味はみつきりません。つまり彼らの作品を理解しようとしても、意図や意味が理解できないのです。

とにかく私たちは分類することによって「分かった」という実感を得ようとしています。でも、彼らの作品は「分かる」ことを拒否しているのだと思います。分類されて、何かの枠に収まるということ。AやBに分類されない「もう一つ」の意味の豊かさを、彼らの作品は表現しているようにも感じます。

分類されないものを、分類せずに、心の中にそのままに置いておくための大切な

時空間。これが、私にとってのアール・ブリュットの意義です。

そこで彼らの作品を観ていると、彼らの多くは空間を一生懸命にびっしりと埋めようとしている。ひょっとしたら、この多産には空虚や空しさに対する彼らの不安や恐怖が表れているのかもしれませんが。彼らは描くことによって、あるいは造形によって、その空虚さを埋めようとするのかもしれませんが。彼らは空虚をみつめ、そこを率直に何かで淡々と埋めようとしているのかもしれませんが。決して格好よいとか、見やすい、というような美学や甘い価値観ではなく。

しかし、私たちが彼らに深い共感を覚えるのは次のような話です。彼らのお母さんや彼らを支援している方たちから聞いたことによると、彼らは自分の作品が注目されることにはあまり関心がありません。立派なスタジオが用意されて、その創造性に周囲が期待をもちはじめると、とたんに描くのをやめてしまうケースもあるそうです。

それは、彼らは自分が生きていくために、作品をつくり続けているからなのかもしれません。アートのために生きているのではなく、生きていくために切実なアートを生み出しているのかもしれない。

何かのためではない、それは無意味な充実かもしれないが、答えはわからない。絶えることのない反復と増殖する自己表現は、彼らが「抱える環境」を得て、目の前の創造的な空虚に向き合っていることの表れなのかもしれない。